エッセイ

いまなぜ、古代史を志すのか

村島　秀次

はじめに

日本の古代史を研究する目的は、やはり日本はどのように誕生したのか、そして日本の国家はどのように成立したのかを認識することにあります。つまりは、日本や日本人のアイデンティティとは何かを求める事にあります。

しかし、在野の立場からすると、今の古代史の専門家の発言を聞くにつけ、二つの大きな問題があると感じます。そのひとつは、研究スタンスの問題であり、もうひとつは、研究の方法論の問題です。

一、敗戦史観とは

前者の問題ですが、戦前の歴史の見方をもし皇国史観と名付けるのであれば、戦後のそれは、私から見ると、敗戦史観と呼べるのではないかと思えます。つまり、敗戦の結果、自分の国の歴史に自信をなくし、戦前に認められていた事実までも、戦後はすべて否定してかかるというような傾向です。皇国史観を批判する立場から、初代神武天皇を否定する心情は理解できますが崇神天皇や神功皇后などの存在を簡単に否定したり、最近では聖徳太子までもいなかったと、平然と言ってのけることに異和感を感じます。存在しないというならば、あらゆる角度からきちんと非存在であることの証明をすべきです。

振り子でたとえると、歴史の見方について戦前は振り子が右（右翼）へ大きく傾いたものが、戦後になってやっと自由に研究が出来る環境が生まれ、振り子は正しいまん中の位置に留まるべきものが、戦前に対する反動から、今度は左（左翼）へ大きく振れているのが現在の状況でしょうか。やはり、振り子を正しく中央に止める作業が必要です。

『日本書記』の記述を読むと確かに、歴史の流れが一本調子で、しかも表現方法が物語のように見えます。しかし、重要なことは、近年発掘が飛躍的に進んだ考古学的知見や、地方に長く残されている神社伝承などを注意深く調査すると、『日本書記』の記述が潤色され、大きく改変されているもの、その物語に登場する英雄たちは必ずしもその存在を否定できないと考えています。日本人は、全く存在すらしない人物を、歴史の英雄として描くでしょうか。ただ、その人物の実際に生きた時代や役割を、政治上の理由から都合よく書き換えてしまうことはあるようです。これが日本人の歴史認識の弱さであると、私は最近感じています。

私は、神武や崇神天皇は実在したと考えるようになりましたが、その実像は『日本書記』の記述とは全く違います。『日本書記』の編纂者は、八世紀の津令国家の立場から神武や崇神天皇の記録を改変しています。この点は、十分注意して正しい歴史像を再構築する必要があります。私の考える歴史像を、『もうひとつの古代史』に書きました。

二、文献史料第一主義

後者の問題は、文献史料第一主義、あるいは一次史料第一主義の弊害です。上述の通り正史である『日本書記』に潤色や改変がある場合、西洋式の、特にドイツ実証主義の歴史学の手法をそのまま入れてしまっては、史実は中々把握できないことになってしまいます。

つまり、基本史料である『日本書記』に史実を尊重する伝統があったのであれば問題は起きませんが、歴史認識よりも政治目的を優先する文化であれば、史実をつきとめることが困難になります。また、同時代史料である一次史料だけではなく、後代の史料や、あるいは地方に残る神社伝承なども可能な限り参考にすべきであると考えます。難しい問題ではありますが、史料批判の上で検討材料として比較判断すべきです。

中国では、古代より起居注という歴史を正しく記録しようという史官の制度が存在し、その起居注の記述をもとに、次の王朝が前の王朝の歴史を書くという伝統がありますが、さらに現代では、文献史料と考古資料の内容が一致してはじめて史実と認定するという「二重証拠法」が主流であると聞きます。

文献史料だけで歴史を判断するのは、もはや無理があります。『日本書記』に対する史料批判も進んでいますが、『日本書記』の記述

は信用できないとする一方で、『日本書記』にはこう書いてあるとか、その意見は『日本書記』には記述がないので信用できないと言った矛盾した議論も時々見かけます。

三、仮説の重要性

文献史料の記述だけに頼るのではなく、考古学的知見や神社伝承などで検証する事により、まず、「仮説」を立てるのが重要です。

そして、複数残った仮設を総合的に比較検証することにより、最も矛盾なく、そして説得力のある仮設を通説とすべきです。そして該当する歴史的事象だけでなく、その前後の歴史事象をも矛盾なく説明できる仮説が正しいのではないでしょうか。

日本では、仮説の存在を認めるのを嫌がるようです。しかし、仮説を立てなければ、そしてそれを継続的に検証する作業を行なわなければ、学問としての歴史学の進歩はありません。自然科学の分野であれば、仮説の設定とその検証は常識です。文献史料による記録がなければ、仮説の設定すら認めないという雰囲気が今の古代史研究にはあるようです。

近年の考古学の発掘の成果には、めざましいものがあります。考古資料は地面の下から発掘されるもので、捨てられていた可能性が高いので、文献史料のように意図的なものが入り込む余地が少ないといえます。また、文献史料は、その時代に当り前のことであればあえて記録に残さないという欠陥があります。したがって、考古学的知見は極めて重要です。

しかし、文献史学と考古学の学問的な方法論は違うので、両者の方法論の違いを理解していないと、文献史学者が考古資料を、考古学者が文献史料を、自分の都合の良いように利用するという問題も起こりうるのです。

おわりに

私が古代史に興味を持ったきっかけは、中学一年生の時でした。前回の東京オリンピックが閉幕した翌年（昭和四十年）、当時出版界は全集ブームでしたが、中央公論社版『日本の歴史』全二十六巻の最初の第一巻が、井上光貞氏の『神話から歴史へ』でした。それまでの考古学の発掘成果も参考にしながら、日本の建国時点の世界をとても興味深く書いていました。その後、宮崎康平氏の『まぼろしの邪馬台国』や、梅原猛氏の『隠された十字架』などを熱中して読みました。

そして、日本の古代の歴史が正確に判っていないことを知り、また学者の先生であれ、在野の研究者であれ、古代史の著作を読むにつれ異和感を持つようになり、定年を機に、自分自身で古代史を調べて見ようとなったのです。

日本は歴史のある素晴らしい国なのに、その国の建国時点の正しい状況が判らないなどとは、とても残念なことです。少くとも、自分自身が納得できる建国の歴史を調べたいと考えています。

会員の方から時々、古代史以外には興味ないのか、と聞かれますが、もちろん、古代史以外の日本の歴史にもとても興味を持っています。特に、戦国や幕末など、時代の変わり目に当たる歴史が好きです。そして、それらの時代については、横歴の例会で、皆さんの発表をお聴きすることで知識を増やしています。いわゆる「耳学問」ですが、とても勉強になります。

私に残されている時間は、さほど長くはないと思っているので、自分自身で文献や論文を読んで、それを現地に確認に出かけるのは、やむを得ず古代史に限っているという訳です。横歴の会合はとても貴重です。歴史を語りながら、飲むお酒もとても美味しいので。

〈参考文献〉

津田左右吉『古事記及び日本書紀の研究』（毎日ワンズ）
内藤　湖南『支那史学史』（東洋文庫）
村島　秀次『もうひとつの古代史』（歴研）

以上